

| 分野 | 専門分野 | 科目名 単位（時間） | 看護学概論 1 単位（30 時間） | 授業 形態 | 講義 演習 | 開講 時期 | 1 年 前期 | | | |
|-------------|--|---------------|----------------------|----------|----------|----------|-----------|--|------|--|
| 講師名 所属 | 山本 真由美 嬉野医療センター附属看護学校 教育主事 原崎 真由美 社会医療法人祐愛会織田病院 看護部長 | | | | | | | | | |
| 授業概要 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護の対象である人間について哲学、生物学などの視点から理解を深める 2. 看護理論家の主要概念とキー概念を概観し、看護の基本的な考え方の変遷について理解を深める 3. 看護に対する基本的な考え方を 4 つの概念「人間」「環境・社会」「健康」「看護」から考察する 4. 保健・医療・福祉の状況を統計の観点から分析し、日本社会における健康ニーズの変遷を考察する 5. 保健・医療・福祉の相互連携やチーム医療の必要性の観点から看護の場の多様性と看護が果たす役割と機能を理解する 6. 専門職である看護職の責務と教育制度、キャリア開発について理解する 7. 基礎看護学実習による初めての看護体験を通して、1 年次における自らの看護観を明らかにする | | | | | | | | | |
| 科目目標 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護全般の概念や規定、定義について理解できる 2. 保健・医療・福祉サービスの連携と看護の機能と役割について理解できる 3. 看護学とその周辺学問に関する知識を深め、看護学を学ぶ意義・意味を考える | | | | | | | | | |
| テキスト | <ol style="list-style-type: none"> 1. 系統別看護講座 専門分野 基礎看護学 [1] 看護学概論 医学書院 2. 看護覚え書 日本看護協会出版社 3. 看護の基本となるもの 日本看護協会出版社 | | | | | | | | | |
| 参考文献 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 系統看護学講座別巻「看護史」医学書院 2. 看護理論 看護理論の 20 の理解と実践への応用 南江堂 | | | | | | | | | |
| 評価方法 | 詳細は別紙「評価計画」参照 | | | | | | | | | |
| | 筆記 | ○ | レポート | ○ | 口頭試問 | | 授業態度 | | 出席状況 | |
| 学修に向けたメッセージ | <p>人間が生活する多様な場において、看護サービスはあらゆる健康レベルにある多様な価値観をもつ生活と健康ニーズに対応するため看護の機能は強化・拡大しています。皆さんが 50 代を迎えるころ、ちょうど 2050 年問題に直面しています。そのころ、皆さんはどこでどのように専門職として活躍しているのでしょうか？人々の健康ニーズを把握し、適切な看護を提供することは専門職として当然の姿ではありますが、その看護実践によって皆さん自身が職業人として、ひとりの人間として成長していきます。看護という仕事は、他の職業と同様に素晴らしい職業ですが、一方で生命と生活に関わる厳しい状況に直面し、常に悩み葛藤しながら多職種とともにかかわっていきます。その苦難を乗り越え「能い看護」を提供するためには、最新の知識、熟練した看護技術、さまざまに人々とアサーティブに信頼関係を築き上げていく人間力、そして、これからは学際的な分野（たとえば人間工学や情報科学など）との共同によって看護を新しい分野から発展させていくクリエイティブさも重要です。いうまでもなく、ナイチンゲールをはじめとする看護の先人の著書から多</p> | | | | | | | | | |

| | くを学び、看護師という仕事に責任と誇りをもってチャレンジしてほしいと思います。 | | |
|------|---|---------|----------------|
| 授業計画 | | | |
| 回数 | 講義内容 | 教授・学習方法 | 担当講師 |
| 1 | <p>1. 看護の基本的な考え方</p> <p>1) 社会と看護の変遷</p> <p>2) 看護の定義</p> <p>(1) 保健師助産師看護師法における規定・定義</p> <p>(2) 看護職能団体による看護の定義</p> <p>(3) 看護理論家にみる看護の定義</p> <p>3) 看護の役割と機能</p> <p>4) 世界および日本における看護の動向と展望</p> | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |
| 2 | <p>1. 看護の基本的な考え方</p> <p>5) 看護理論と看護</p> <p>(1) 看護理論の意義</p> <p>(2) 看護理論の知識構造レベルとメタパラダイム</p> <p>(3) 知識構造レベル（看護哲学）と詳細</p> <p>① フローレンス＝ナイチンゲール</p> <p>② ヴァージニア＝ヘンダーソン</p> <p>③ アーネスティン＝ウイーデンバック</p> <p>(4) 知識構造レベル（概念モデル）と詳細</p> <p>① ドロセア＝オレム</p> <p>② シスター＝カリスタ＝ロイ</p> <p>(5) 知識構造レベル（理論・中範囲理論）と詳細</p> <p>① ヒルデガード＝E＝ペプロウ</p> <p>② アイダ＝ジーン＝オーランド</p> <p>③ ジョイス＝トラベルビー</p> <p>演習課題「主要な看護理論家の看護概念とキー概念の理解」</p> | 講義・演習 | 教育主事 山本 真由美 |
| 3 | <p>2. 職業としての看護の理解</p> <p>1) 職業としての成りたちと確立</p> <p>2) 専門職としての自律と発展</p> <p>(1) 社会の変遷と看護ニーズの変遷</p> <p>(2) 看護の対象の生活の場と看護提供の場の拡大</p> <p>(3) 看護の専門分化と看護機能の強化・拡大</p> <p>(4) 医療安全と看護師の責務</p> <p>(5) 看護と職業倫理</p> <p>(6) 看護の発展と看護研究</p> | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |
| 4 | <p>3. 看護の対象である人間の理解</p> <p>1) 身体（からだ）と精神（こころ）</p> | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |

| | | | |
|---|---|-------|----------------|
| | <ul style="list-style-type: none"> (1)解剖学的理解 (2)生理学的理解 (ホメオスタシス) (3)ストレス学説とコーピング理論 (4)心理学的理解 (患者心理) (5)人間のニードに関する理論 (6)危機理論 | | |
| 5 | <p>3. 看護の対象である人間の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> 2) 生涯成長・発達しつづける存在 <ul style="list-style-type: none"> (1)身体的発育 (2)心理・社会的側面における発達 3) 人間の「暮らし」 <ul style="list-style-type: none"> (1)生活者としての人間 (2)個人と家族・集団・地域 | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |
| 6 | <p>4. 日本人の健康と生活</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 健康のとらえ方 <ul style="list-style-type: none"> (1)健康の概念・定義と保健 (2)障害の概念・定義と社会福祉 (3)健康の実現： <ul style="list-style-type: none"> ①ヘルスプロモーション ②プライマリ・ヘルスケア 2) 日本人の健康観の変遷：主観的健康観 | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |
| 7 | <p>4. 日本人の健康と生活</p> <ul style="list-style-type: none"> 3) 国民の健康状態と生活背景 <ul style="list-style-type: none"> (1)統計と健康指標 (2)健康の社会的決定要因と健康格差 (3)平均寿命と健康寿命 (4)健康・生活と QOL <p>演習課題「我が家の救急箱からみえる健康観と健康行動」</p> | 講義・演習 | 教育主事 山本 真由美 |
| 8 | <p>4. 日本人の健康と生活</p> <ul style="list-style-type: none"> 4) 国民のライフサイクルと健康・生活 <ul style="list-style-type: none"> (1)胎児期：結婚と出生 (2)小児期：こどもの成長発達と就学 (3)成人期：労働とストレス、家庭(子育て・介護) (4)老年期：老いと死、老老介護 (5)全期間：災害、パンデミック | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |
| 9 | <p>5. 保健・医療・福祉の現状と看護の役割・機能の拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> 1) 疾病構造の変化と予防的視点 2) 多様な価値観に基づく生活と看護活動の場の拡大 3) 超高齢化社会と介護保険制度に基づく看護活動 4) 健康の維持・増進に関する看護活動 | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |

| | | | |
|----|---|------------|-----------------|
| | <ul style="list-style-type: none"> 5) 国際化における看護活動 6) 災害時における看護活動 7) 保健・医療・福祉の連携・協働チーム活動 | | |
| 10 | <ul style="list-style-type: none"> 6. 看護サービス提供の場と看護の実際 <ul style="list-style-type: none"> 1) 看護サービスの担い手と連携チーム <ul style="list-style-type: none"> (1) 他職種・多職種との連携・協働 (2) 他職種・多職種との情報共有 2) チーム医療 <ul style="list-style-type: none"> (1) チーム医療の前提と分類 (2) 医療チームの条件と組織づくり (3) チーム医療における看護の役割と機能 | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |
| 11 | <ul style="list-style-type: none"> 6. 看護サービス提供の場と看護の実際 <ul style="list-style-type: none"> 3) 医療施設に定義されている医療提供施設とその特徴 <ul style="list-style-type: none"> (1) 病院の特徴と看護サービス (2) 診療所および病院の外来における看護 (3) 介護老人保健施設における看護（介護サービス） (4) 助産所における看護 4) 地域における看護と継続看護 <ul style="list-style-type: none"> (1) 地域における看護の対象と機能 (2) 多様な場における看護活動と継続看護 <ul style="list-style-type: none"> ① 公衆衛生看護 ② 学校看護 ③ 産業看護 ④ 在宅看護 | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |
| 12 | <ul style="list-style-type: none"> 6. 看護サービス提供の場と看護の実際 <ul style="list-style-type: none"> 5) 看護サービス提供の実際 | 講義 | 看護管理者 原崎 真由美 |
| 13 | <ul style="list-style-type: none"> 6. 看護サービス提供の場と看護の実際 <ul style="list-style-type: none"> 5) 看護サービス提供の実際 <ul style="list-style-type: none"> 事例紹介：織田病院（佐賀県南西部） | 講義 | 看護管理者 原崎 真由美 |
| 14 | <ul style="list-style-type: none"> 7. 看護職の資格と養成にかかわる制度とキャリア開発 <ul style="list-style-type: none"> 1) 看護師の資格と法的制度 2) 看護職の養成制度（看護基礎教育）と継続教育 3) 看護職の専門性とキャリア開発 4) キャリア開発と看護研究 | 講義 | 教育主事 山本 真由美 |
| 15 | 試験 中間試験 終了時試験 | 試験 (評価) | 単位認定者 山本 真由美 |

| 分野 | 専門分野 基礎看護学 | 科目名 単位（時間） | 対象把握の技術 1 単位（30 時間） | 授業 形態 | 講義 演習 | 開講 時期 | 1 年 前期 | | | |
|-------------|---|---------------|------------------------|----------|----------|----------|-----------|--|------|--|
| 講師名 所属 | 鳥井 太貴 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験:看護師 9 年 馬場 亜希子 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験:看護師 18 年 | | | | | | | | | |
| 授業概要 | 1. 看護技術の概念：看護技術の概念、看護技術の修得について理解できるようにする。 2. コミュニケーションの技術：講義を中心にロールプレイを取り入れながら、看護におけるコミュニケーション技術について理解できるようにする。 3. フィジカルアセスメント:看護の対象である人間の身体状況に対する判断を行うことの意義とバイタルサイン測定の方法、身体計測、呼吸、循環、腹部のアセスメントの方法について講義・演習を通して学ぶ。 | | | | | | | | | |
| 科目目標 | 1. 看護技術の概念について理解できる 2. 看護におけるコミュニケーションの意義と方法を理解できる 3. 看護の対象である人間の身体状況に対する判断を行うことの意義と方法を理解できる | | | | | | | | | |
| テキスト | 1. 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学〔2〕 基礎看護技術 I 医学書院 2. 基礎・臨床看護技術 医学書院 | | | | | | | | | |
| 参考文献 | 1. 系統看護学講座 人体の構造と機能〔1〕 解剖生理学 医学書院 2. フィジカルアセスメントガイドブック 医学書院 3. 看護 形態機能学 日本看護協会出版会 4. 系統看護学講座 基礎分野 人間関係論 | | | | | | | | | |
| 評価方法 | 詳細は別紙「評価計画」参照 | | | | | | | | | |
| | 筆記 | ○ | レポート | | 口頭試問 | | 授業態度 | | 出席状況 | |
| 学修に向けたメッセージ | <p>基礎看護学では、看護実践能力の基礎となる基本的な看護技術の知識と技術を学びます。看護技術は大きく 14 項目に分類されその種類は様々です。看護技術は、知識を身につけただけでは技術を修得することはできず、同時に技術的側面も自身の努力によって養っていかなければなりません。知識を十分に活用しながら、手先を動かし、身体全体を使い「技術」を自分の身体内部に取り込んで「技能」へと変化させる必要があります。つまり、知識獲得と同時に、反復した実技訓練を行うことで、技能を身につけてこそ、技術修得が可能となります。看護技術修得における考え方を基に、技術修得に励まれることを期待しています。</p> <p>看護は、その対象となる相手を知ることから始まります。その手段・方法である「コミュニケーションの技術」「フィジカルアセスメント」について演習を通して学んでいきます。これらの技術は、対象を理解し必要な看護を考えていく臨床推論を行うための技術とも言えます。コミュニケーションの技術は、人間関係を形成します。人間関係論で学んだ知識を活用し、看護場面におけるコミュニケーションの実際について深く考える機会とさせていただきます。また、フィジカルアセスメントを実践するには、正しい観察技術を修得することが必須です。対象の身体の中で起きていることを正確に把握する知識と技術を修得しましょう。</p> | | | | | | | | | |
| 授業計画 | | | | | | | | | | |

| 回数 | 講義内容 | 教授・学習方法 | 担当講師 |
|----|--|---------|----------------|
| 1 | 1. 看護技術の概念 1) 看護技術とは 2) 看護技術の特徴 3) 看護技術の修得 4) 看護技術の基本原則 | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 2 | 2. コミュニケーションの技術 1) コミュニケーションとは 2) 医療におけるコミュニケーション | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 3 | 2. コミュニケーションの技術 3) 関係構築のためのコミュニケーション (1) 看護の基盤となる人間関係の形成 (2) コミュニケーションに影響する因子 | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 4 | 2. コミュニケーションの技術 3) 関係構築のためのコミュニケーション (3) 効果的なコミュニケーション技術 | 演習 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 5 | 2. コミュニケーションの技術 4) 患者—看護師関係を深める過程 (1) アサーティブネス (2) プロセスレコード | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 6 | 3. フィジカルアセスメント 1) フィジカルアセスメントの意義 2) 看護におけるフィジカルアセスメントの意義 3) アセスメントの手段 | 講義 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| 7 | 3. フィジカルアセスメント 4) 身体計測とその介助 | 講義・演習 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| 8 | 3. フィジカルアセスメント 5) バイタルサインの測定 (1) バイタルサインの意義 | 講義 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| 9 | 3. フィジカルアセスメント 5) バイタルサインの測定 (2) バイタルサインの測定方法 | 講義・演習 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| 10 | 3. フィジカルアセスメント 6) バイタルサイン測定（技術演習） | 演習 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| 11 | 3. フィジカルアセスメント 7) フィジカルアセスメント演習 (1) 呼吸器系 | 演習 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| 12 | 3. フィジカルアセスメント | | 専任教員 |

| | | | |
|----|--|------------|----------------|
| | 7) フィジカルアセスメント演習 (2) 循環器系 | 演習 | 鳥井 太貴 |
| 13 | 3. フィジカルアセスメント 7) フィジカルアセスメント演習 (3) 消化器系 | 演習 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| 14 | 3. フィジカルアセスメント 7) フィジカルアセスメント演習 (4) 運動器 | 演習 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| 15 | 3. フィジカルアセスメント 7) フィジカルアセスメント演習 (5) 感覚器系 | 演習 | 専任教員 鳥井 太貴 |
| | 終講試験 | 試験 (評価) | 単位認定者 鳥井 太貴 |

| 分野 | 専門分野 | 科目名 単位（時間） | 医療・療養環境を支える技術 1単位（30時間） | 授業 形態 | 講義 演習 | 開講 時期 | 1年 前期 | | |
|---------------|---|---------------|----------------------------|----------|-------------|---------------|----------|--|------|
| 講師名 所属 | 大坪 香織 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験：看護師19年 | | | | | | | | |
| 授業概要 | 看護学の土台となる基礎的知識であり、専門分野Ⅱに共通する学習内容の一つである。DVD・動画教材を活用しながら看護の初学者である学生が理解できるように教授する。各単元における授業概要は以下の通りである。 1. 療養環境を整える技術： 患者を取り巻く環境を理解し、療養環境を整えるための基本的な知識と技術を教授する。 2. 安全を守る技術： 人間工学で学習するヒューマンエラーについての内容を想起し、医療における患者の安全を守る基本的な知識・技術を教授する。 | | | | | | | | |
| 科目目標 | 1. 患者を取り巻く環境を理解し、療養環境を整える技術を習得できる 2. 医療における患者の安全をまもる基本的な知識・技術を習得できる | | | | | | | | |
| テキスト | 1. 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [2] 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 2. 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 3. 基礎・臨床看護技術 医学書院 4. 系統看護学講座 専門分野 看護の統合と実践 [2] 医療安全 医学書院 | | | | | | | | |
| 参考文献 | 適宜紹介する | | | | | | | | |
| 評価方法 | 詳細は別紙「評価計画」参照 | | | | | | | | |
| | 筆記 | ○ | レポート | | 口頭試問 | | 授業態度 | | 出席状況 |
| 学修に向けたメッセージ | 環境には、内部環境と外部環境があり、人間と相互に影響し合っています。ここで扱う「療養環境を整える技術」では、患者を取り巻く療養環境が与える影響と療養環境を整える意義を理解し、患者が環境に適応できるよう環境に働きかけることの実践を学びます。また、「安全を守る技術」では、医療安全や感染予防など、あらゆる看護技術を支える要素について学びます。これらの要素なしに看護援助は成立しません。それぞれの根拠を理解し、看護実践につなげてください。 | | | | | | | | |
| 授業計画 | | | | | | | | | |
| 1. 療養環境を整える技術 | | | | | | | | | |
| 回数 | 講義内容 | | | | 教授・ 学習方法 | 担当講師 | | | |
| 1 | 1. 環境とは 内的（内部）環境と外的（外部）環境 2. 看護における環境とは | | | | 講義 | 専任教員 大坪 香織 | | | |
| 2 | 3. 療養環境を整える意義と環境が人に与える影響 4. 屋内環境の調整 1) 病室内気候（湿度・温度） 2) 音 3) 採光と照明 4) 臭い 5) 色彩 | | | | 講義 | 専任教員 大坪 香織 | | | |
| 3 | 5. 病床の整備 | | | | 講義 | 専任教員 | | | |

| | | | |
|------------|---|-------------|----------------|
| | 1) 病棟と病床 2) 病室：個室、多床室 3) 病床の整備 | | 大坪 香織 |
| 4 | 6. ベッドメイキング（技術演習） | 演習 | 専任教員 大坪 香織 |
| 5 | 7. 臥床患者のリネン交換 | 講義 | 専任教員 大坪 香織 |
| 6 | 7. 臥床患者のリネン交換（技術演習） | 演習 | 専任教員 大坪 香織 |
| 2. 安全を守る技術 | | | |
| 回数 | 講義内容 | 教授・ 学習方法 | 担当講師 |
| 7 | 1. 安全の目的 2. 安全を阻害する因子 | 講義 | 専任教員 大坪 香織 |
| 8 | 3. 医療における安全 1) 医療事故 2) 看護事故 | 講義 | 専任教員 大坪 香織 |
| 9 | 3. 医療における安全 3) 看護事故防止のための対策 4) 看護における安全の実際 | 講義 | 専任教員 大坪 香織 |
| 10 | 4. 包帯法 1) 援助に必要な基礎知識 | 講義 | 専任教員 大坪 香織 |
| 11 | 4. 包帯法 2) 援助の実際 | 演習 | 専任教員 大坪 香織 |
| 12 | 5. 感染予防 1) 感染成立の仕組み 2) 感染予防の意義 3) 感染予防の原則 | 講義 | 専任教員 大坪 香織 |
| 13 | 6. 感染予防の方法 1) 標準予防策（スタンダードプリコーション） 2) 感染経路別予防策 | 講義・演習 | 専任教員 大坪 香織 |
| 14 | 7. 洗浄・消毒・滅菌 消毒薬の使い方 8. 感染性廃棄物の取り扱い 9. 無菌操作の技術 | 講義 | 専任教員 大坪 香織 |
| 15 | 10. 無菌操作（技術演習） 1) 滅菌手袋の装着方法 2) 滅菌物の取り扱い 滅菌包・鑷子・滅菌ガーゼ・消毒綿球の取り扱い | 演習 | 専任教員 大坪 香織 |
| | 終講試験 | 試験（評価） | 単位認定者 大坪 香織 |

| 分野 | 専門分野 | 科目名 単位(時間) | 生活を支える技術Ⅰ 1単位(30時間) | 授業 形態 | 講義 演習 | 開講 時期 | 1年 前期 | | | |
|------------------------------|--|---------------|------------------------|----------|----------|---------------|----------|--|------|--|
| 講師名 所属 | 江下 栄子 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験:看護師8年 劔持 葉子 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験:看護師14年 | | | | | | | | | |
| 授業概要 | <p>生活を支える技術Ⅰは、「活動と休息の援助技術」「清潔・衣生活の援助技術」の単元で構成されている。各単元の授業概要は、以下の通りである。</p> <p>1. 活動と休息の援助技術 人間工学における学習を踏まえて、人間にとって活動と休息の意義と体位・移動動作の援助技術、休息、睡眠への援助技術について教授する。</p> <p>2. 生活・衣生活の援助技術 人間にとって身体を清潔に保つ意義と基本的な清潔の援助技術について教授する。</p> | | | | | | | | | |
| 科目目標 | <p>1. 活動・休息の意義を理解し、基本的な技術を習得できる</p> <p>2. 清潔と衣生活の意義を理解し、基本的な技術を習得できる</p> | | | | | | | | | |
| テキスト | <p>1. 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院</p> <p>2. 根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術 医学書院</p> | | | | | | | | | |
| 参考文献 | <p>1. 系統看護学講座 専門基礎分野 人体の構造と機能 [1] 解剖生理学 医学書院</p> <p>2. 看護 形態機能学 日本看護協会出版会</p> | | | | | | | | | |
| 評価方法 | 詳細は別紙「評価計画」参照 | | | | | | | | | |
| | 筆記 | ○ | レポート | | 口頭試問 | | 授業態度 | | 出席状況 | |
| 学修に向けたメッセージ | <p>「活動と休息の援助技術」の活動においては、姿勢を保つこと・活動することの意義を理解し、ボディメカニクス(身体機能)を最大限に活用した安全・安楽な移動・移送技術の基礎を学びます。ボディメカニクスの活用については、移動・移送技術だけでなく、食事・排泄・清潔・衣生活などあらゆる看護技術に必要な技術です。ここで自身のボディメカニクスを活用することを意識して技術を修得されることを期待しています。「清潔・衣生活の援助技術」では、清潔動作・衣生活について普段あたりまえに行っている自身の清潔・衣生活の行動と照らしながら考えて欲しいと思います。また、各技術の概要(目的・方法など)についての事前学習や動画視聴等で技術の根拠や留意点を確認してから演習に臨んでください。</p> | | | | | | | | | |
| 授業計画 1. 活動と休息の援助技術 | | | | | | | | | | |
| 回数 | 講義内容 | | | | 教授・学習方法 | 担当講師 | | | | |
| 1 | 1. 体位・活動の援助 1) 姿勢を保つこと、活動することの意義 2) 同一体位の有害性 3) 体位の種類 4) 活動・運動のアセスメント | | | | 講義 | 専任教員 劔持 葉子 | | | | |
| 2 | 2. 安楽な体位を保持するための援助技術 | | | | 講義 | 専任教員 | | | | |

| | | | 劔持 葉子 |
|----------------|---|------------|----------------|
| 3 | 3. 体位・活動の援助 1) ボディメカニクスを用いた移動動作 (1) 体位変換 (技術演習) | 演習 | 専任教員 劔持 葉子 |
| 4 | 3. 体位・活動の援助 1) ボディメカニクスを用いた移動動作 (2) 床上移動 (3) 車いす・ストレッチャー移動・移送 (技術演習) | 演習 | 専任教員 劔持 葉子 |
| 5 | 4. 休息・睡眠の援助 1) 睡眠に影響を及ぼす因子 2) 睡眠障害の種類 3) 休息・睡眠への援助 | 講義 | 専任教員 劔持 葉子 |
| 2. 清潔・衣生活の援助技術 | | | |
| 回数 | 講義内容 | 教授・学習方法 | 担当講師 |
| 6 | 1. 清潔と衣服を着ることの意義 2. 清潔を保つための援助の必要性 | 講義 | 専任教員 江下 栄子 |
| 7 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 1) 衣服の種類と選択 2) 入浴 | 講義 | 専任教員 江下 栄子 |
| 8 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 3) 足浴・手浴・爪きり・耳垢除去 | 講義 | 専任教員 江下 栄子 |
| 9 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 4) 臥床患者の寝衣交換 (技術演習) | 講義・演習 | 専任教員 江下 栄子 |
| 10 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 5) 臥床患者の全身清拭 (技術演習) | 講義・演習 | 専任教員 江下 栄子 |
| 11 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 5) 臥床患者の全身清拭 (技術演習) | 演習・演習 | 専任教員 江下 栄子 |
| 12 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 6) 頭髪の清潔の目的と方法 | 講義 | 専任教員 江下 栄子 |
| 13 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 臥床患者の洗髪 (技術演習) | 演習・演習 | 専任教員 江下 栄子 |
| 14 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 7) 口腔ケア・義歯洗浄 (技術演習) | 講義・演習 | 専任教員 江下 栄子 |
| 15 | 3. 身体の清潔を保つための援助の方法 8) 陰部洗浄 (技術演習) | 講義・演習 | 専任教員 江下 栄子 |
| | 終講試験 | 試験 (評価) | 単位認定者 江下 栄子 |

| | | | | | | | | | | |
|-------------|--|---------------|--------------------------|----------|----------|----------|---------------|--|------|--|
| 分野 | 専門分野 | 科目名 単位（時間） | 生活を支える技術Ⅱ 1 単位（30 時間） | 授業 形態 | 講義 演習 | 開講 時期 | 1 年 前期 | | | |
| 講師名 所属 | 岩谷 望美 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験：看護師 10 年 | | | | | | | | | |
| 授業概要 | <p>生活を支える技術Ⅱは、「食事の援助技術」「排泄の援助技術」の単元で構成されている。講義は、DVD の視聴やグループワークを用いながら進める。</p> <p>各単元の授業概要は、以下の通りである。</p> <p>1. 食事の援助技術 形態機能学Ⅰ、栄養学で学んだ知識を想起し、人間にとっての食事の意義と基本的な食事の援助技術について教授する。</p> <p>2. 排泄の援助技術 形態機能学Ⅰで学んだ知識を想起し、人間にとっての排泄の意義と基本的な排泄の援助技術について教授する。</p> | | | | | | | | | |
| 科目目標 | <p>1. 食事の意義を理解し、基本的な技術を習得できる</p> <p>2. 排泄の意義を理解し、基本的な技術を習得できる</p> | | | | | | | | | |
| テキスト | <p>1. 統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院</p> <p>2. 根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術 医学書院</p> | | | | | | | | | |
| 参考文献 | <p>1. 系統看護学講座 専門基礎分野 人体の構造と機能 [1] 解剖生理学 医学書院</p> <p>2. 看護 形態機能学 第4版 日本看護協会出版会</p> | | | | | | | | | |
| 評価方法 | 詳細は別紙「評価計画」参照 | | | | | | | | | |
| | 筆記 | ○ | レポート | ○ | 口頭試問 | | 授業態度 | | 出席状況 | |
| 学修に向けたメッセージ | <p>人にとって食べることは、生命を維持するうえで必要不可欠な行為であり、なんらかの原因で食事摂取が困難となったとき、人は生命の危機に直面します。「食事の援助技術」では、必要な栄養所要量摂取の視点とおいしく安全に摂取する方法について、栄養学や形態機能学Ⅰで学習した知識を想起しながら学びます。</p> <p>人間にとって排泄することは、生命維持に不可欠であると同時に誰もが営む日常的な行為です。排泄行動が自力でできなくなったとき、人は大変な羞恥心を感じ、援助者に対して遠慮や恐縮といった感情を抱きます。「排泄の援助技術」では、対象の心身の状態を推しはかって援助にあたること、その人の持てる力を最大限発揮できるように援助を考える必要があります。食事・排泄の援助技術において、看護をうける患者の立場を自分事として考えられることを期待しています。</p> | | | | | | | | | |
| 授業計画 | 1. 食事の援助技術 | | | | | | | | | |
| 回数 | 講義内容 | | | | 教授・学習方法 | | 担当講師 | | | |
| 1 | 1. 人間にとっての食事の意義 2. 食行動のアセスメントと看護師の役割 | | | | 講義 | | 専任教員 岩谷 望美 | | | |
| 2 | 3. 食事の援助 | | | | 講義 | | 専任教員 | | | |

| | | | |
|------------|---|---------|----------------|
| | 1) 栄養の摂取方法 2) 経口摂取に対する援助 | | 岩谷 望美 |
| 3 | 4. 食事摂取が困難な患者の食事の工夫（技術演習） | 講義・演習 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 4 | 4. 食事摂取が困難な患者の食事の工夫（技術演習） | 講義・演習 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 5 | 5. 非経口摂取に対する援助 1) 経管栄養法 | 講義 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 6 | 5. 非経口摂取に対する援助 2) 経静脈栄養法 | 講義 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 2. 排泄の援助技術 | | | |
| 回数 | 講義内容 | 教授・学習方法 | 担当講師 |
| 7 | 1. 人間にとっての排泄の意義 | 講義 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 8 | 2. 排泄のアセスメントと看護師の役割 | 講義 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 9 | 3. 排泄の援助 1) 排泄の援助を受ける対象の心理 2) 自然排泄を促す援助 | 講義 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 10 | 3. 排泄の援助 3) 排泄行動が妨げられた対象への援助 | 講義 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 11 | 3. 排泄の援助 4) 排尿障害時の援助 5) 排便障害時の援助 | 講義 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 12 | 4. 便器・尿器を用いた床上排泄の援助（技術演習） | 講義・演習 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 13 | 5. 一時的導尿 | 講義 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 14 | 5. 一時的導尿（技術演習） | 演習 | 専任教員 岩谷 望美 |
| 15 | 6. 浣腸（技術演習） | 演習 | 専任教員 岩谷 望美 |
| | 終講試験 | 試験（評価） | 単位認定者 岩谷 望美 |

| 分野 | 専門分野 | 科目名 単位（時間） | 看護過程 1 単位（30 時間） | 授業 形態 | 講義 演習 | 開講 時期 | 1 年 後期 |
|-------------|---|---------------|---------------------|----------|----------|----------------|-----------|
| 講師名 所属 | 馬場 亜希子 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験:看護師 18 年 | | | | | | |
| 授業概要 | 本科目は、対象の健康問題を解決するために、理論的知識を用いて看護過程の展開技術を教授する。看護過程の理解には、紙上事例について NANDA-I の看護診断を用いて教授する。 | | | | | | |
| 科目目標 | 対象の健康問題を解決する為に、理論的知識を用いて看護過程の展開技術を習得できる | | | | | | |
| テキスト | 1. 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [2] 基礎看護技術 I 医学書院 2. NANDA-I 看護診断 定義と分類 医学書院 | | | | | | |
| 参考文献 | 1. 検査値ガイドブック サイオ出版 2. 看護過程に沿った対症看護 学研 3. これなら使える看護診断 医学書院 4. 看護診断ハンドブック 医学書院 5. 関連図でよくわかる病態・看護診断・看護記録 かみくだ看護診断過程 日総研出版 | | | | | | |
| 評価方法 | 詳細は別紙「評価計画」参照 | | | | | | |
| | 筆記 | ○ | レポート | ○ | 口頭試問 | 授業態度 | 出席状況 |
| 学修に向けたメッセージ | 看護過程の展開とは、アセスメントに基づく情報を活用して看護を計画的に展開する看護技術です。看護専門職は、対象の状況をアセスメントし、看護判断を行い、それに基づいてケアの内容と方法を決定して看護を提供します。看護過程のアセスメントは看護実践につなげる臨床判断です。看護に必要な情報を収集できること、得られた情報をアセスメントする方法、批判的思考（クリティカルシンキング）や実際に起きていること（情報）の関連性の見出し方、知識の使い方、考え方を学ぶ筋道を理解できることを目指しています。 | | | | | | |
| 授業計画 | | | | | | | |
| 回数 | 講義内容 | | | | 教授・学習方法 | 担当講師 | |
| 1 | 1. 看護過程と基礎的理論の関連 2. 看護過程に必要な能力 | | | | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 | |
| 2 | 3. 看護過程の概要 4. 臨床判断と臨床推論 5. 批判的思考とは | | | | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 | |
| 3 | 6. NANDA-I 分類法と診断概念の理解 1) NANDA-I の主な看護診断概念の理解① | | | | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 | |
| 4 | 6. NANDA-I 分類法と診断概念の理解 2) NANDA-I の主な看護診断概念の理解② | | | | 演習 | 専任教員 馬場 亜希子 | |
| 5 | 7. 事例の情報収集（電子カルテ等より） | | | | 演習 | 専任教員 | |

| | | | |
|----|---------------------------------------|--------|-----------------|
| | | | 馬場 亜希子 |
| 6 | 8. 事例の病態関連図 | 講義・演習 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 7 | 9. 事例の情報整理 | 講義・演習 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 8 | 10. 事例の看護診断過程の理解 アセスメント・仮診断① | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 9 | 10. 事例の看護診断過程の理解 アセスメント・仮診断② | 演習 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 10 | 10. 事例の看護診断過程の理解 関連図と看護診断① | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 11 | 10. 事例の看護診断過程の理解 関連図と看護診断② | 演習 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 12 | 11. 事例の看護診断と看護計画立案 | 講義・演習 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 13 | 11. 事例の看護診断と看護計画立案 | 演習 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 14 | 12. 実施・評価の考え方の理解 13. 看護記録の意義、種類の理解 | 講義 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| 15 | 14. 計画に基づく実施と評価、フィードバック | 講義・演習 | 専任教員 馬場 亜希子 |
| | 終講試験 | 試験（評価） | 単位認定者 馬場 亜希子 |

| | | | | | | | | | | |
|-------------|--|---------------|----------------------------|----------|----------|----------|-----------|--|------|--|
| 分野 | 専門分野 | 科目名 単位(時間) | 臨床看護総論演習 I 2 単位 (45 時間) | 授業 形態 | 講義 演習 | 開講 時期 | 1 年 前期 | | | |
| 講師名 所属 | 久原 佳身 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験:看護 10 年 池ヶ谷 知美 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験:看護 18 年 | | | | | | | | | |
| 授業概要 | <p>臨床看護総論演習 I は、「経過からみた健康障害」「指導技術」「主要症状を示す患者の看護」の単元で構成されている。各単元の授業概要は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 経過からみた健康障害 健康障害をもつ対象を経過という視点からとらえ、それぞれの経過の特徴について事例を用いながら教授する。 指導技術 健康を支援する必要がある対象を理解し、健康教育をするための指導技術の実際について教授する。講義は、事例やグループワークなど用いて進める。 主要症状を示す患者の看護 健康障害をもつ対象の代表的な症状である痛み、発熱、呼吸困難、浮腫について、それぞれの概念と看護について教授する。また、症状を緩和するための看護技術について、DVD やシミュレーション教材を用いた演習を用いながら教授する。 | | | | | | | | | |
| 科目目標 | <ol style="list-style-type: none"> 健康障害をもつ対象を経過という視点からとらえることができる 対象の健康を支援するために必要な教育、指導の基本について理解できる 健康障害をもつ対象の代表的な症状とその看護について理解できる | | | | | | | | | |
| テキスト | <ol style="list-style-type: none"> 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [2] 基礎看護技術 I 医学書院 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [4] 臨床看護総論 医学書院 看護過程に沿った対症看護 学研 根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術 医学書院 | | | | | | | | | |
| 参考文献 | エビデンスに基づく 症状別看護ケア関連図 中央法規 | | | | | | | | | |
| 評価方法 | 詳細は別紙「評価計画」参照 | | | | | | | | | |
| | 筆記 | ○ | レポート | ○ | 口頭試問 | | 授業態度 | | 出席状況 | |
| 学修に向けたメッセージ | <p>健康障害は、経過別にみると急性期、回復期、慢性期、終末期に分類されます。各健康障害の経過を理解することは、看護の対象が今どの経過にあり今後どのような経過をたどるかを予測すること、経過を見据えてその時に必要な看護を判断し実践することにつながります。指導技術においては、慢性期にある対象の意思決定や治療への主体的な参画を支援する学習支援について、事例を用いた支援の実際を学びます。</p> <p>主要症状というところどのような症状が思い浮かぶでしょうか。症状はたくさんありますが、ここでは「痛み」「発熱」「浮腫」「呼吸困難」の症状について、事例を用いながら学びます。各症状の要因とメカニズム、対象の身体の中で何が起こっているかをその経過やフィジカルアセスメント、治療、検査データ等から判断し必要な看護を考えます。形態機能学の既習学習や自身の体験を想起しながら演習に臨んでください。</p> | | | | | | | | | |
| 授業計画 | 1. 経過からみた健康障害 | | | | | | | | | |

| 回数 | 講義内容 | 教授・学習方法 | 担当講師 |
|-----------------|---|---------|----------------|
| 1 | 1. 急性期にある患者の特徴 1) 急性期とは 2) 急性期の3つのタイプ 3) 急性期にある患者と家族の特徴 | 講義 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 2 | 2. 回復期にある患者の特徴 1) 回復期とは 2) 回復期にある患者と家族の特徴 3. 慢性期にある患者の特徴 1) 慢性期とは 2) 慢性期にある患者と家族の特徴 (1) 疾患の受容プロセス (2) 慢性期患者のたどる経過プロセス (病みの軌跡) | 講義 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 3 | 4. 終末期にある患者の特徴 1) 終末期とは 2) 死の受容プロセス 3) 終末期にある患者と家族の特徴 (1) トータルペイン (2) 家族の特徴 (3) 家族の危機とニーズ | 講義 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 2. 指導技術 | | | |
| 回数 | 講義内容 | 教授・学習方法 | 担当講師 |
| 4 | 1. 学習支援 1) 看護における学習支援 2) 学習支援に必要な理論 3) 健康に生きることを支える学習支援 4) 健康状態の変化に伴う学習支援 5) 個人を対象とした学習支援 6) 家族を対象とした学習支援 7) 集団を対象とした学習支援 | 講義 | 専任教員 久原 佳身 |
| 5 | 2. 学習支援の実際 健康指導案の作成 | 講義 | 専任教員 久原 佳身 |
| 6 | 2. 学習支援の実際 健康指導案の演習 (技術演習) | 演習 | 専任教員 久原 佳身 |
| 7 | 2. 学習支援の実際 健康指導案の演習・評価 (技術演習) | 演習 | 専任教員 久原 佳身 |
| 3. 主要症状を示す患者の看護 | | | |
| 回数 | 講義内容 | 教授・学習方法 | 担当講師 |
| 8 | 1. 症状別看護について | 講義 | 専任教員 |

| | | | |
|----|--|-------|----------------|
| | 1) 症状に注目する理由 | | 池ヶ谷 知美 |
| 9 | 2. 痛みのある患者の看護 1) 痛みとは 2) 痛みの種類 3) 痛みのメカニズム 4) 痛みに対する援助 | 講義 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 10 | 2. 痛みのある患者の看護 5) 痛みのある患者の事例を用いた臨床判断 (1) 事例のアセスメント (2) 事例に必要な看護計画立案 | 講義・演習 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 11 | 2. 痛みのある患者の看護 5) 痛みのある患者の事例を用いた臨床判断 (3) 事例に基づいた看護の実践・評価 | 演習 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 12 | 3. 発熱のある患者の看護 1) 発熱とは 2) 発熱の要因とメカニズム 3) 発熱を緩和する援助 (1) 薬剤 (2) 保温 (3) 覆法 | 講義 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 13 | 3. 発熱のある患者の看護 3) 発熱を緩和する援助：冷・温覆法（技術演習） | 演習 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 14 | 3. 発熱のある患者の看護 4) 発熱のある患者の事例を用いた臨床判断 (1) 事例のアセスメント (2) 事例に必要な看護計画立案 | 演習 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 15 | 3. 発熱のある患者の看護 4) 発熱のある患者の事例を用いた臨床判断 (3) 事例に基づいた看護の実践・評価 | 演習 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 16 | 4. 浮腫のある患者の看護 1) 浮腫とは、脱水とは 2) 浮腫の種類 3) 浮腫の要因とメカニズム 4) 浮腫の状態のアセスメントと緩和する援助 | 講義 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 17 | 4. 浮腫のある患者の看護 6) 浮腫のある患者の事例を用いた臨床判断 (1) 事例のアセスメント | 演習 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 18 | (2) 事例に必要な看護計画立案 (3) 事例に基づいた看護の実践・評価 | | |
| 19 | 5. 呼吸困難のある患者の看護 1) 呼吸困難とは 2) 呼吸困難をきたす要因とメカニズム 3) 呼吸困難を緩和する援助 | 講義 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 20 | 5. 呼吸困難のある患者の看護 | 演習 | 専任教員 |

| | | | |
|----|--|--------|-----------------|
| | 3) 呼吸困難を緩和する援助 (1) 酸素ボンベの取り扱いと酸素マスク法 (2) 口腔内・鼻腔内吸引（技術演習） (3) 吸入薬・ネブライザー（技術演習） | | 池ヶ谷 知美 |
| 21 | 5. 呼吸困難のある患者の看護 4) 呼吸困難のある患者の事例を用いた臨床判断 (1) 事例のアセスメント (2) 事例に必要な看護計画立案 | 演習 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 22 | 5. 呼吸困難のある患者の看護 4) 呼吸困難のある患者の事例を用いた臨床判断 (3) 事例に基づいた看護の実践・評価 | 演習 | 専任教員 池ヶ谷 知美 |
| 23 | 終講試験 | 試験（評価） | 単位認定者 池ヶ谷 知美 |

| 分野 | 専門分野 基礎看護学 | 対象学年 | 1年 | 開講時期 | 後期 | | | | |
|---|---|------------|------------|------|----|------|------|---------------|---|
| 科目 | 援助技術実習 | 単位 (時間) | 1単位 (45時間) | | | | | | |
| 講師名 所属 | 馬場 亜希子 嬉野医療センター附属看護学校 専任教員 実務経験:看護師 18年 | | | | | | | | |
| <p>実習目的・実習目標</p> <p>基礎看護学実習では、学内において学んだ基礎的知識・技術・態度を、実際の看護場面で展開し、看護の基礎的能力を養う。本実習の単元は、「見学実習」と「生活援助技術実習」で構成されている。すべての臨地実習のスタートである「見学実習」は、今後の看護に対する興味関心を高める機会になるため、実習指導者や他職種・多職種と積極的に関わっていく内容である。1年次の修了時に計画されている「生活援助技術実習」は、基礎看護学の講義・演習において習得した知識や技術を実際の臨地において受け持ち患者の状況や状態に応じて適用する実習であると同時に倫理的判断や専門職としての責任を自覚する実習でもある。本実習の履修は、2年次に計画している看護過程実習履修の条件になっている。</p> | | | | | | | | | |
| <p>臨地実習の概要：</p> <p>1) 見学実習</p> <p>病院における患者の療養生活や看護活動の実際、療養生活を送る患者を取り巻く医療チームの活動を見学することにより、看護に対する関心を高める。</p> <p>2) 生活援助技術実習</p> <p>1名の患者を受け持ち、療養生活の援助を行う実習である。看護の対象である人間は、基本的ニードを持つ。ヘンダーソンは、看護の対象を健康人・病人・終末期とあらゆる健康レベルの人も含むと定義し、看護師の援助を必要とする人は「体力・意志力・知識」のいずれかが不足しているために適切な行動がとれないと考え、「その足りない部分の担い手」になることが看護の機能であること、その人が自立できるようにしむけること、人間の基本的ニードに対応するように患者の行動を援助することが基本的看護である、と述べている。また、対象者の基本的欲求を判断するとき、病理的状态（さまざまな症状や症候群）と常在条件（年齢や文化的背景）を考慮する必要があると述べている。本実習は、初学者である学生が基本的ニードを持つ人間の理解と基本的看護を実践するために、ヘンダーソンの理論を用いる。生活者である患者を通して、日常生活における基本的ニードの充足状況や「体力・意志力・知識」のいずれかで不足している部分を判断し、自立に向かう援助の必要性と具体的な援助方法を導き出し、実習指導者や専任教員の指導・助言を受けながら看護実習を経験する。</p> | | | | | | | | | |
| <p>授業計画</p> <p>1. 見学実習</p> <p>1) 実習目標および実習内容</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>実習目標</th> <th>実習内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1. 患者の療養環境を知る</td> <td>①生活の場としての環境 ②その人らしい日常生活を送るための環境 ③療養の場としての環境</td> </tr> </tbody> </table> | | | | | | 実習目標 | 実習内容 | 1. 患者の療養環境を知る | ①生活の場としての環境 ②その人らしい日常生活を送るための環境 ③療養の場としての環境 |
| 実習目標 | 実習内容 | | | | | | | | |
| 1. 患者の療養環境を知る | ①生活の場としての環境 ②その人らしい日常生活を送るための環境 ③療養の場としての環境 | | | | | | | | |

| | |
|---------------------------------|---|
| 2. 療養環境を整える看護活動の実際を知る | ①その人らしい日常生活を送るための援助 ②回復に向かうための検査、治療を受ける患者への援助 ③療養環境を整えるためのチーム間の連携 |
| 3. 療養生活を送る患者を取り巻く医療チームの活動の実際を知る | ①患者を支えるための職種と役割 ②患者を支える医療チーム間の情報共有の実際 ③チーム間における看護師の役割 |

2) 学習方法

オリエンテーション、看護活動の見学（シャドウウィング）

各部署の医療専門職の活動の見学、インタビュー

カンファレンス、プレゼンテーションと討議

2. 生活援助技術実習

1) 実習目標および実習内容

| 実習目標 | 実習内容 |
|---------------------------------|---|
| 1. 受け持ち患者の基本的ニーズが理解できる | ①日常生活行動の基本的ニーズ（ヘンダーソンの14の基本的ニーズに沿った日常生活行動） |
| 2. 受け持ち患者の日常生活援助の必要性が理解できる | ①受け持ち患者の日常生活における充足状態の判断 ヘンダーソンの14の基本的ニーズに沿った情報整理・分析・解釈 ②基本的ニーズを充足する能力（受け持ち患者の体力・意志力・知識）の理解 ③基本的ニーズに影響を及ぼす常在条件の有無と内容 ④基本的ニーズを変容させる病理的状态の有無と内容 ⑤患者の自立（患者の成り行き・ニーズの充足）の理解 |
| 3. 受け持ち患者の自立に向かう援助を指導者とともに実施できる | ①基本的ニーズの充足に向けた援助の実施の判断 ②基本的ニーズ充足に向けた工夫 |
| 4. 患者の反応から基本的ニーズの変化がわかる | ①期待された結果の達成状況の判断（患者の反応である言葉、沈黙、表情、動作など） ②基本的ニーズを充足する能力（受け持ち患者の体力・意志力・知識）の高まりの程度 ③基本的ニーズの変化に伴う計画の修正や工夫 |
| 5. 看護師としての基本的な態度を身につけることができる | ①共感的理解（コンパッション） ②患者の権利擁護（アドボカシー） ③ケア選択や行為の根拠について説明（アカウンタビリティ） ④ケアリング ⑤協同 |

2) 学習方法

受け持ち看護（1名の患者を受け持ち実習指導者や専任教員とともに援助を展開する）

3. 実習施設

独立行政法人国立病院機構嬉野医療センター

4. 実習期間

1) 見学実習 1年次後期（11月） 1日間

2) 生活援助技術実習 1年次後期（11月～12月） 5日間

履修条件

学則細則第3章第12条

専門分野の授業科目において単位履修ができていない者は学習の順序性から当該科目の実習を履修することができないことがある。詳細は履修規程や履修要領を参照にすること。

参考文献

1. DVD 看護学生のための初めての実習ガイド VOL. 1 基本編（実習の心得）, 2 実践編（実習の実際）
2. 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[1]看護学概論 医学書院
3. 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [2] 基礎看護技術 I 医学書院
4. 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学 [3] 基礎看護技術 II 医学書院
5. 根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術 医学書院
6. 事例でなっとく看護と法、MCメディカ出版
7. ヴァージニア・ヘンダーソン著：看護の基本となるもの、日本看護協会出版会
8. 根拠と事故防止からみた 基礎・臨床看護技術 医学書院

評価方法：

実習出席状況、実習内容、評価基準に基づき評価する。（実習要項・実習要領・評価基準参照）